

水害と闘った人々～江の川と沿岸の暮らし～

森原下ノ原遺跡（江津市） 調査年：2019(令和元)年～2021(令和3)年

真木 大空

私は令和元年に島根県教育庁埋蔵文化財調査センターに就職し、初めて発掘調査を行ったのが江津市松川町の森原下ノ原遺跡でした。この調査は、初めての発掘調査ということだけでなく、色々な意味で一生忘れられないものとなりました。

調査2年目の2020年7月、この月は「令和2年7月豪雨」と呼ばれた集中豪雨が日本列島全体を襲っていました。島根県も例外ではなく、中国地方最大の河川「江の川」のほとりで発掘調査を行っていた私は、降り続く雨に不安と緊張を感じていました。そんなある日、7月14日にそれは起こりました。上流に降った雨の影響で江の川の水位が一気に上昇し、ついに氾濫が始まったのです。辺りは茶色く濁った水で覆い尽くされ、私はどうすることもできませんでした。流域一帯は至るところで浸水被害が発生し、川には大量の流木が流れていた光景をよく覚えています。こうした水害は、堤防造築のための事前発掘調査を早く進めなければ、という意味を固くさせましたが、森原下ノ原遺跡の調査を進めると、そこに現れたのは約1,000年前の水害の痕跡だったのです。

森原下ノ原遺跡は縄文時代中期(約5,000年前)から現代まで、ほぼ途切れることなく、人が活動していたことが明らかとなった重要な遺跡です。縄文時代から古墳時代までは集落が営まれていたようですが、その数百年後、平安時代頃に江の川の水害によって土地の一部が大きく削り取られたことがわかりました。その規模はかなり



森原下ノ原遺跡の弥生集落と水害の痕跡

大きかったようで、弥生時代の竪穴住居の一つは約3分の1が失われていました。また、遺跡内には氾濫によって運ばれたであろう粗い砂の層が幾重にも堆積し、江の川による水害と闘ってきた人々の歴史を感じました。

多くの成果を得られた中で、水と人との関わりを示す土器があります。写真は古墳時代前期(約1,600年前)の壺です。首の部分に3カ所、線刻によって表現された絵のようなものが描かれています。渦巻きは龍? 三角形や縦の波線は雷でしょうか。龍や雷は水との関係を連想させます。古墳時代の人々は、こうした土器を使い、川のほとりで祭祀を行っていたのかもしれませんが。水と人が共生してきた江の川。川は恵みと脅威をわたしたちに与えてきたのだと発掘調査から感じました。

(島根県埋蔵文化財調査センター主任主事)



古墳時代の絵画土器